

徳山地方の幕末維新期に活躍した群像たち（その六）

— 山崎隊を中心に（後編） —

会員 小林省三

はじめに

本誌第二六号・第二七号で、幕末維新期に徳山藩内の中心的軍団の一つとして活躍した山崎隊の誕生の経緯と構成および四境戦争から鳥羽伏見戦争終結時までの山崎隊を中心とした徳山藩諸隊の戦績について報告した。

本稿では未だ十分な調査ができていないが、戊辰戦争の終幕すなわち幕末維新の戦乱の終わりまでの山崎隊および新たに明治元年（一八六八）八月七日に再編成された徳山藩の中心的軍団の一翼を担い活躍した猷功隊の戦績ならびに幕末維新期に徳山藩内で編成された諸隊の編成年度やその構成などの梗概を紹介する。

一、秋田口出陣

明治元年九月三日、秋田方面応援の朝命を受けた徳山藩では、山崎隊一中隊（二番小隊と四番小隊）と猷功隊一中隊（一番小隊と二番小隊）が明治元年九月二八日に徳山城内に整列して徳山藩主毛利元蕃淡路守に拝謁後、周防三田尻港に出張った。そして一〇月二日には周防三田尻港に集結した萩宗藩の整武隊と共にその総勢一三〇〇余人が山田顕義参謀の指揮下に入り、英国のサントス艦に乗り込み一〇月三日に三田尻港を出港し、秋田方面の官軍救援のため秋田の土崎港に向かった。一〇月九日秋田領土崎港に着港、風波の静まった翌日一〇日と一一

日の両日に全軍土崎港に揚陸した。

出陣した山崎隊の構成は、出先参謀藤村義一、寺田三郎、控士官片山賢一郎、竹中直三郎、岩本近之進で二番小隊司令は、友安吉之進、半隊司令一人、嚮導四人、四番小隊司令は小葉竹百枝、半隊司令一人、嚮導四人の他兵士九六人、輜重方三人、附属一人、人夫三〇人の構成であった。また献功隊の構成は、取締参謀林与、参謀兼書記内山正太郎、斥候二人、控士官一人、一番小隊司令庄原轟之允、半隊司令一人、嚮導四人、二番小隊司令神代恰、半隊司令一人、嚮導四人、兵士九六人、輜重方四人、附属四人、人夫三〇人外に病院二人、醫員三人、會計一人、その他人夫三人の構成であった。

秋田方面の官軍救援のため、全軍が土崎港に揚陸したときには既に奥州の反兵(旧幕軍)は悉く降伏していた。しかし榎本艦隊数千人が箱館方面を襲い松前江差などを奪って箱館方面の形勢險悪であったので、土崎港揚陸の徳山藩山崎隊と献功隊は秋宗藩の整武隊と共に一〇月一二日の総督府仁和寺宮の御達しに従い、両藩軍を混成し

て二軍に分ち、同月二五日に第一軍は土崎港から出発しまた、第二軍は翌二六日陸路より青森に向つた。一一月四日に第一軍、同月五日には第二軍が弘前を経て青森に着陣した。

二、箱館戦争

(1) 官軍の春季攻勢諸準備

官軍側では、一一月九日に山田顕義を青森口陸軍参謀に任じ、青森口の出征諸藩兵を統率させた。同月一九日には箱館の脱走軍(旧幕軍)の追討令を下し、同月二七日には清水谷府知事が青森口総督を兼任した。初期の総督府の編成では、参謀は山田顕義と大田黒惟信であった。明治二年(一八六九)二月には朝廷では青森口兵力増強の必要を認め、黒田清隆を参謀に任用し、薩摩藩兵と水戸藩兵を増派する事にした。

当時青森口に出陣した徳山藩の兵員は、明治元年二月六日の時点で総数二五四人であった。

明治二年四月四日に山田顕義は陸軍兼海軍参謀に任せ

られた。

春季攻撃では青森口在陣の諸藩兵を三梯団とし、第一軍を先鋒軍とし続いて第二軍、第三次には第三軍と逐次乙部の上陸させ、海岸道、木古内口、二股口にそれぞれ兵を分派して津軽海峡に面する海岸に進出させ、漸次敵を圧迫して箱館平野に進出するという作戦方針が樹立された。徳山藩山崎隊一中隊は第一軍に属し、徳山藩献功隊一中隊は第三軍に属した。

(2) 官軍乙部上陸と江差攻略

明治二年四月六日、山田顕義陸軍兼海軍参謀の指揮する第一軍一五〇〇人が官軍海軍の各艦に分乗し、乙部上陸を目指して青森港を出港した。同月九日八時過ぎには全艦が乙部村沖に到着し、直ちに全陸兵を揚陸させた。

第一軍の進撃路は松前口（浜街道）と二股口に分けられ、徳山藩山崎隊一中隊は松前口軍に属し、松前・長州（萩宗藩）・福山・大野藩軍と共に総勢六〇〇人で江差に向け前進し、強い抵抗を受けることなく江差を占領した。江差占領後官軍は上陸前の計画を変更し、新たに一

軍を編成して木古内口にも前進することにした。この変更によりその兵力が不足したが、四月一二日には第二軍が江差に到着した。所が第二軍が松前口、木古内口、二股口の各戦線に加わっても予期した戦果が挙がらず、官軍は各所の戦闘でしばしば敗退した。

第三軍は黒田参謀および大田黒参謀指揮下のもと薩摩・長州（萩宗藩）・水戸・備前・筑後・福山・津軽・徳山（献功隊一中隊）・松前の九藩兵総数一九〇〇余人で構成されていた。四月一五日に青森港から出陣して翌一六日第三軍は江差に到着し、直ちに全軍を松前口、木古内口、二股口および新たに追加された安野呂口に分進させた。徳山藩献功隊一中隊は二股口を進撃した。

(3) 松前口の戦闘

第一軍の先頭隊松前藩兵は四月一〇日の午後四時頃には、急行軍でもって敵を追撃し江良町北端に達して脱走軍（旧幕軍）と接触した。翌一一日も官軍は前進を続行し、茂草村に到達した。

ところが四月一一日の午後脱走軍（旧幕軍）は、江差

を準備していて松前福山城に敗走した全軍をもって反攻することを決し、総勢五〇〇人が松前福山城から出陣し、江良方面に前進を開始した。反攻脱走軍（旧幕軍）は同日午後六時頃には官軍斥候隊を撃退し、その後夜戦となり茂草村方面の戦鬪で官軍を撃退した。そして反攻脱走軍（旧幕軍）は勝利に乗じて四月一二日の払暁過ぎには江良町に達し、この地を回復した。この戦鬪には赤神に宿泊していた徳山藩山崎隊一中隊も長州（萩宗藩）兵等と共に参戦したが、敗れ同月一二日払暁頃には退却し、江良の北方小砂子まで後退した。この戦鬪での徳山藩山崎隊員の戦死傷者は、戦死者五人、負傷者八人である。四月一二日払暁過ぎ江良町を再奪取した反攻脱走軍（旧幕軍）は、箱館の旧幕軍総本部からの木古内口等の支援要請を受け早くも同日中に松前福山城に撤退した。

四月一七日第二軍と第三軍の増援隊を加えた官軍主力は大攻勢に出て江良・清部へと前進した。徳山藩山崎隊は、この前進中に折戸台場を落とし、官軍山ノ手軍に加わり松前・弘前各藩兵と共に松前福山城西二キロの御髪

山の山腹に登り、南面して山下保壘を攻撃した。官軍正面軍は山ノ手軍と共に午後五時頃松前福山城下に突入し、松前福山城に攻入ったが既に脱走軍（旧幕軍）は城を捨て退却していた。この戦鬪で徳山藩山崎隊員の兵士一人が戦死し、兵士一人が負傷した。

脱走軍（旧幕軍）は四月一八日午前一時頃には福島にたどり着き、引き続き退却を続けた。その後官軍の松前口進撃軍は、ようやく四月二二日に至り木古内に到着し、官軍木古内口進撃軍と合流した。その後松前・木古内両口より前進の官軍連合軍は、海岸道で随所に脱走軍（旧幕軍）を破り、四月二九日に箱館平野内の有川（箱館北西七キロ、海岸）付近まで進出した。

(4) 二股口の戦鬪

四月九日乙部村に上陸した官軍第一軍の一部は二股口に分進し、その日に鶉村（乙部東南東位置八キロ）に進み宿営した。同月一二日に江差に到着した官軍第二軍の二股口分進軍と共に翌一三日に官軍は二股口での総攻撃を開始した。官軍は同日午後三時頃には天狗岳付近、午

後五時頃に台場山陣地を攻撃したが、夜戦となり翌一日も払暁より午前九時頃まで戦闘は続いた。しかし脱走軍（旧幕軍）は頑強に抗戦したため官軍は攻めあぐみ遂に攻撃を止め、稲倉石付近に後退した。四月一四日夕刻には第二軍の二股口分進軍は館村の守備についた。

四月二三日午後四時頃、前線で起きた小競り合いが全面衝突に発展し、日没とともに夜戦となったが、官軍は終夜攻撃を続け、翌二四日の払暁に及んだ。戦闘はその日の日没となつても続いたが、到底敵陣地の攻略は不可能と判断され、攻撃中止命令がその夜下され、官軍は天狗岳付近の陣地に守備兵を残し、先の宿営地に後退した。この戦闘には第三軍増援隊の徳山藩献功隊一中隊も参加した。これが献功隊の箱館戦争での初陣である。

その後小規模な戦闘が続いたが、四月二九日夜二股口の脱走軍（旧幕軍）は全軍箱館および五稜郭に撤退した。二股口の官軍も五月一日夕刻にそれぞれの宿営地を出発し、翌二日午後六時には大野村・市ノ渡村に到着した。そして徳山藩献功隊一中隊は大川台場の守備を命ぜられ

た。安野口進撃の官軍も同月四日には落部に進み、五月八日には箱館平野に入り官軍全軍は箱館平野で合流した。

(5) 箱館平野の緒戦

脱走軍（旧幕軍）は五月一日、三日、六日と官軍側の七重浜陣営に夜襲を敢行しては引き上げた。

同月八日には朝三時頃、脱走軍（旧幕軍）五〇〇人が大川村台場に襲来した。その時官軍は反撃し、大川村台場を守備していた徳山藩献功隊一中隊もこれを迎え撃つて破り、追撃して赤川・石川の二村まで進出した。この戦闘での徳山藩献功隊員の戦死傷者は、戦死者三人、負傷者二人である。

(6) 箱館、五稜郭付近の戦闘と陥落

五月一〇日、山田海陸参謀、黒田陸軍参謀、増田・曾我参謀らが旗艦甲鉄艦で軍儀を開催し、同月一日午前三時を期しての箱館作戦の発動を決定した。その概要は、主力の正面軍と海上を進撃し箱館山背後に奇襲上陸する別動軍による二方面からの攻撃であった。徳山藩献功隊

一中隊は、山田海陸參謀指揮下の正面軍中の山ノ手軍に属し、四稜郭と神山台場を攻撃し一日中には両陣地を占拠し、備前兵と共に四稜郭に駐屯した。この戦闘での徳山藩献功隊員の戦死傷者は、戦死者一人、負傷者四人である。徳山藩山崎隊一中隊は、黒田陸軍參謀指揮下の別動軍に属し、五月一日晩二時に飛竜丸に乗船して富川を出港し山背泊に上陸した。上陸後、弁天台場を攻撃し、その出撃は三度に及び各地で勝利した。この戦闘での徳山藩山崎隊員の戦死傷者は、戦死者一人、負傷者四人である。同月一五日に至り、弁天台場の脱走軍（旧幕軍）は降伏した。また、同月一七日晩の三時徳山藩兵を含む官軍の大軍は千代ヶ岡（旧津軽陣屋）を攻撃し、同日中に占拠した。五月一八日午後二時、五稜郭は開城した。翌一九日の午前一〇時には総督府が有川から五稜郭に移された。

五月二七日、徳山藩山崎・献功二隊は、官軍諸藩兵と共に逐次軍艦陽西艦に乗船し、箱館を出港した。六月朔日には品川に着艦揚陸した。そして六月二四日、徳山藩

山崎・献功両隊は品川を出港して同月二七日浪速に揚陸後七月三日安治川を出港し、七月一〇日浜崎に着岸し徳山に凱旋した。（註①）

三、徳山藩の諸隊

平成一三年六月の時点で、独立した一隊に限らず付属隊や合併・隊名変更した隊および各地域・方面での軍事組織の呼称を含めて長州藩諸隊（支藩など含む）は四三六隊の存在が確認されている。この収録によれば、旧徳山藩には一五隊の諸隊が存在していたことが確認できる。（註②）しかしこの度本稿作成のため調査したところ旧徳山藩内には一九隊が編成されていた事が判明した。これら諸隊について調査をした内容を各隊編成年度別に報告する。

(1) 文久三年（一八六三）

七月二六日、旧徳山藩領奈古・大井村両村では奈古村の西村利右衛門と中村半兵衛が「奈古・大井両浦農兵世話方」に任命され奈古・大井両浦農兵隊が編成された。

この隊は、徳山城下から遠く隔たる日本海に面した海防をその任務とした。

一〇月一八日、旧徳山藩領奈古・大井村では地下獵師より選抜し、狙撃隊編成せよとの沙汰があつた。

(2) 元治元年（一八六四）

正月一七日、農兵銃陣小隊二隊が編成された。その構成内容は、長野保蔵以下五三人と木村金右衛門以下八三人であつた。

(3) 慶応元年（一八六五）

四月一四日、山崎隊が編成された。（註③）

九月二八日、領内農町兵隊が編成された。その構成は、徳山二小隊、遠石・栗屋辺一小隊、下松辺一小隊、富海一小隊、富田辺一小隊、福川辺一小隊、河内・生野屋辺一小隊と徳山砲隊（五六人）であり、規則も定められ農兵隊入隊中は小隊袴の着用と長脇差を帯びることが許され、技芸を試験したうえで上等と下等に分けられ、上等の者には名字帯刀が許された。また訓練は月に三日で、一、二、三、七、一一、一二月の六カ月間実施され、年

間一八日を数えた。

一月二日、九月二八日編成の領内農町兵隊を再編成し、二団に分け徳山中央から東を東衛団何番小隊、西を西衛団何番小隊と呼称した。また技芸上等の者は小隊加入中苗字帯刀を許された。東衛団は農町兵三二〇人で構成され、遠石関門から徳山札場まで東衛団二番小隊が回番した。西衛団は農町兵二五〇人で構成され、川崎関門から徳山札場まで西衛団二番小隊が回番し、富海駅には西衛団第三分隊が派遣された。両衛団の主任務は遠石関門（東）、川崎関門（西）の警備であつたが戦時には動員体制もとられた。明治元年三月三日に東西両衛団は解散され、西衛団隊員の一部は当時隊員を八〇人増員した山崎隊に吸収された。

この月また第一大隊が編成された。隊員は二三六人で足軽・中間で編成され、銃隊四中隊の構成であり、各中隊に中隊司令士を任命し、その下に小隊司令士一人、半隊司令士二人、嚮導四人、鼓手二人が任命されていた。

一二月、農町兵七四人で第一砲隊、農町兵三〇人で下

松砲隊、農町兵三〇人で富海砲隊、地下獵師八〇人で狙撃隊が編成された。

(4) 慶応二年（一八六六）

一月、荒仕子四二人で臼砲隊を編成した。慶応二年六月二日から七月一三日の間、徳山藩銃隊一中隊と臼砲隊一隊が四境戦争小瀬川口に出陣し活躍した。

六月二三日、旧徳山藩領奈古・大井両村防御のため小銃編成の農町兵隊結草団が編成された。総監は徳山藩士伊藤三郎治（高二五石、中小姓）の二男湊で隊員八〇人で構成されていた。

八月一三日、徳山藩では練兵塾を献功堂と改称し、諸隊を敵愾軍と総称した。敵愾軍は、朝気隊、斥候銃隊、武揚隊、順祥隊で構成された。朝気隊は、諸士八一人、二小隊で構成されていた。斥候銃隊は諸士九人構成で、武揚隊は穴戸彦右衛門（高一五〇石、馬廻）支配の小隊で徒士四〇人で構成されていた。順祥隊は堀田俊馬（高一四二石、馬廻）役座支配の二小隊で御持弓八二人で構成されていた。

(5) 明治元年（一八六八）

八月七日、敵愾軍は解隊され朝気隊、斥候銃隊、武揚隊、順祥隊を合併して献功隊が編成された。編成時の状況を次の史料で知ることができる。

史料（註④）

【大令録】

寛

此度献功隊御編束ニ付其向愼而御委任被仰付候条、依而左之通

一 苗字持以上十七歳より四十歳迄、本主嫡子末子

強壯之族編束之事

一 司令始役配之面々ハ勿論、兵士ニ至迄於下人撰之上可申出候事

但役付之分ハ四十歳以上たりとも人撰勝手次

第之事

一 強壯之者たり共学館入学之間は編束被差除候事

一 御内輪役御医師并別御有之面々同断之事

右之通編束法被相定候ニ付士気作興兵律嚴肅、何時

も急場御用相立可仕旨被仰出候事

戊辰八月七日

八月一六日、一七歳から三五歳の農町民を志願によつて銃卒に採用し、御雇揚兵隊を編成した。一中隊（二小队）構成で初代参謀は遠藤貞一郎（高六〇石、馬廻）であつた。明治二年四月に御雇揚兵隊は新兵隊と改称された。（註⑤）

四、萩宗藩諸隊の反乱と徳山藩諸隊の解隊

明治三年（一八七〇）二月九日、萩宗藩諸隊の反乱（長州藩脱隊騒動）鎮庄のため徳山藩献功・山崎・新兵の各隊（三〇〇人）は反乱軍鎮庄第三軍に属し富海に出陣、佐波川河畔で反乱軍と戦い、二月十日には反乱軍の拠点である勝坂関門を攻撃し夜には攻略した。二月一日、反乱軍鎮庄戦は終結した。この反乱軍鎮庄戦で徳山藩兵戦死者は二人、負傷者一三人と記録されている。

明治四年（一八七二）七月二五日、朝廷の趣意により献功隊・山崎隊・新兵隊は解隊を命ぜられた。その時、

献功隊の原田幸以下二三人と山崎隊の河本台五郎以下五人は山口藩に移管された。（註⑥）

おわりに

戊辰戦争は、幕藩制国家にかわる統一国家のあり方をめぐつて、相違する構想を持った政治勢力が激突した戦争であつた。本稿は一方の政治勢力＝薩長倒幕派（官軍）に属し鳥羽・伏見戦争から箱館戦争に出兵した徳山藩諸隊（山崎隊・献功隊）の戦績の梗概を研究報告として『徳山地方史研究』第二六号、第二七号に投稿したものの続稿である。徳山藩諸隊は多くの戦死傷者を出しながら鳥羽・伏見戦争から遠く東北地方・北海道へと転戦し、官軍の一翼として戦い、明治維新という一大変革の達成に貢献した。また、幕末維新期には徳山藩内でも多くの諸隊が編成された。その編成の経緯や構成などの梗概を紹介した。本稿では与えられた紙幅の関係で、箱館戦争については徳山藩兵の出撃した戦線以外の多くの戦線などの記述は割愛した。

註

① 箱館戦争における徳山藩諸隊（山崎隊・献功隊）の活躍についての引用文献など詳しくは、拙稿「箱館戦争における徳山藩諸隊（山崎隊・献功隊）の活躍について」（『山口県地方史研究』第九八号、二〇〇七）を参照のこと。

② 『山口県史 史料編 幕末維新6』別冊

『長州諸隊一覧』 参照

③ 山崎隊については、拙稿「徳山地方の幕末維新期に活躍した群像たち（その四）」（『徳山地方郷土史研究』二六号、二〇〇五）を参照のこと

④ 徳山市史編纂委員会編

『徳山市史史料 中』 一七二頁

⑤ 兼崎茂樹編『橙堂遺稿補遺』 三三一頁

⑥ 徳山市史編纂委員会編

『徳山市史 上』 六八七頁

料としているが、それらについては註記していない。

付記 本稿作成にあたり、多くの啓蒙書籍などを参考史